

常小學

吉澤八郎編纂

卷

T1A1

10

(SA99)

塚

尋常小

東京

文

尋常小學第四讀本

下卷

第一課

東京

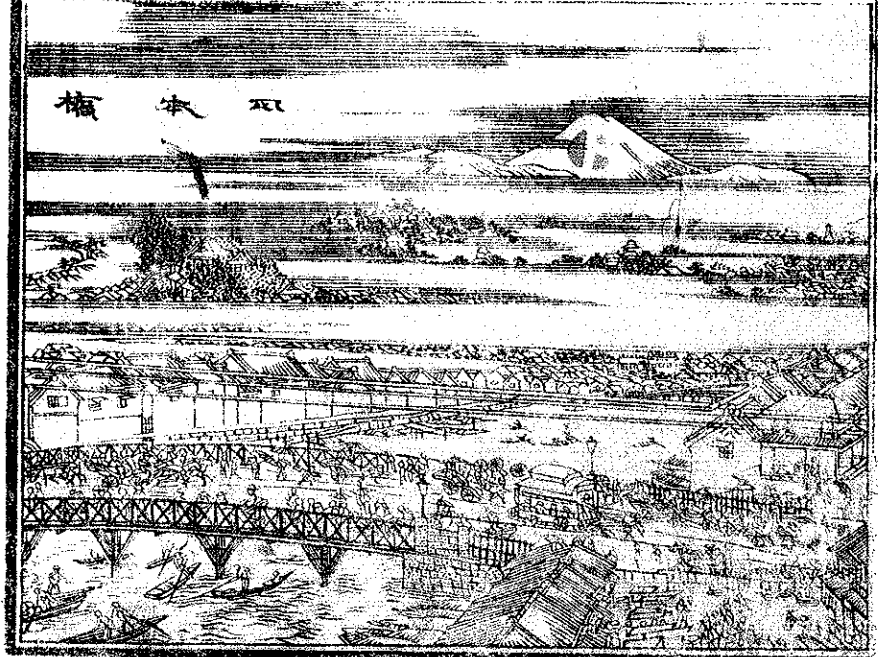
佐澤太郎 編纂
塚 達校閱

沃野 皇城 壯麗 瓦斯燈 電信
線 公園 貴賤 眺 歡 靖國神
社 遊觀 勝地 停車場 線路

東京を我日本帝國の大都府として。東西二里餘。南北殆んど三里。面積六方里餘あり。東南は内海に抱き。西北は沃野と連り。墨田川其東を流す。皇城ハ其正中にあり。市街ハ壯麗にして。月に繁榮し。物産は日々小四方より輻輳す。市中ハ大通りにても。瓦斯燈の設備ありて。暗乃夜も猶晝のおやう。各地に通ずる電

信線ハ縦横と連りて。遠近の音信立どころ。小通むべし。大路にも鐵道馬車あり。人を乗せて走り。地下にも水道あり。清水を引きて飲料。小供も府の中央と日本橋あり。全國ハ里程を計る元標とす。淺草。上野。芝。深川。及び日枝神社。飛鳥山。小公園の設けあり。貴賤上下ハ別なく。暇ある時ハ。花火を賞し。涼を納れ。紅葉

を觀雪哉眺久。四時
と毫に心目を歡む
しめざるをふし。又
九段阪此上は靖國
神社あり。國事小死
せるもの、靈を祭
ふ所とて地形高く
庭園廣くして花木



を列ね種ゑ池沼清泉を引く。亦遊觀
勝地の一なり。新橋及び上野小汽車の
停車場あり。新橋の線路を神奈川に達
す。漸次京都大阪小連接をべし。上野は
線路も宇都宮を経て白川小達を。漸次
仙臺青森と連接すべし。南北の兩線路
共小各支線あり。正南よりは品川灣あり
又府内の川路ハ縱横小流通し物貨の

運漕極免て便なり。實は帝國大都府の名は背かざるなり

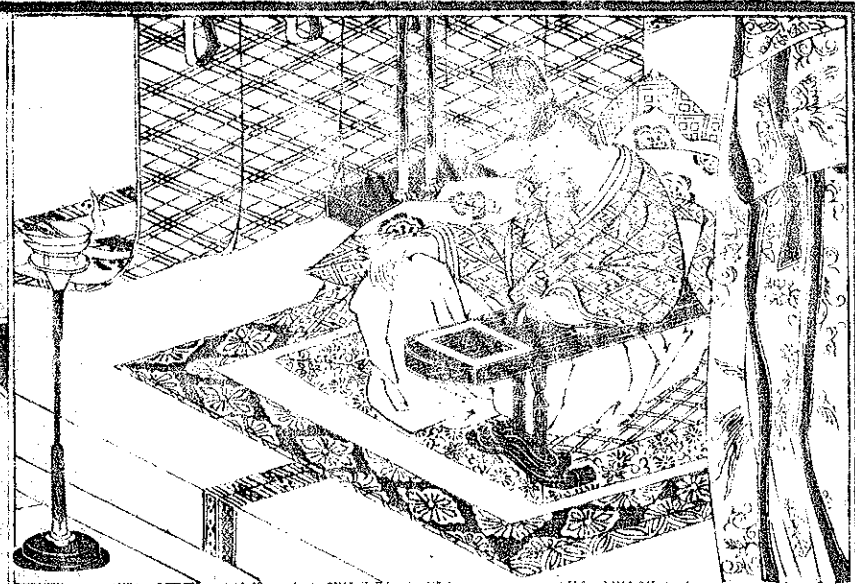
第二課

醍醐天皇

施 憫 延喜 仁恕 脱 九重

餒 凍 艱苦 驗 祖先 恩澤

我國世々ノ天皇ハ。皆仁德ヲ施シ民ヲ憫ミ賜ヘリ。中ニモ延喜ノ帝ハ。殊ニ仁



恕ノ御心深ク在シマセリ。或ル寒夜ニ御衣ヲ脱ガセ賜ヒ。朕九重ノ内ニ居ルモ猶寒氣ニ堪ヘ難シ。天下貧民ノ中ニハ。必ズ餓死凍エル者アラン。朕獨リ重ネ著ルニ忍ビンヤ

ト宣ヒテ親ラ其艱苦ヲ驗ミタマヘリ。
夫天下萬民ノ君上ニシテ御心ヲ用ヒ
賜フコト猶此ノゴトシ我等臣民タル
モノハ皆祖先ヨリ世々ノ恩澤ヲ被フ
リ來リシモノナレバ其萬分ノ一ヲモ
報イ奉ルノ念暫モ忘ルベカラズ是國
民タルノ務トイフベシ

第三課

米記

生命 繫 農家 漬 苗代 蒔
經 穗 結 雜草 肥 幾回 精
米 容易 粗末

米は我國産中の第一として萬民日々
の食料とし生命を繫ぐべき大切なも
じなり其米を如何ふして作るものか
るゝ汝等之を知まじや春暖の候に方

里山學科 第四節
り農家先づ其種子を水に漬し置き。後ふ之を揚げ曝して。大陽に温氣を受けし。免芽の出る。或待ちて。苗代に蒔き。其苗の七八寸に至る時。之を移し植うる。を田植といふ。植ゑて後七八十日を経て。穂を出し花を著け實を結ぶ。ものなり。凡そ種子を蒔きてより取り上げに至るまで。水を溉ぎ又ハ水を干し。雑草



或抜き取り肥しを施す等。其手数を費まこと幾回なる。或知らむ。又取り上る。其後精米とも。おまど。其骨折も容易。お。故に汝等飯。或食む。毎。農家。其辛苦を思ひて。一

粒たりとも決して粗末をなすべからず

第四課

銅

最良 勝 伸 電氣器械 錫 亞

鉛 交 鍋釜

銅ノ最良ナルハ我國産ニ勝ルモノナシ。總ベテ銅ハ金銀ニ比スレバ硬固ナレドモ鐵ニ較ブレバ柔軟ニシテ伸シ

易キヲ以テ其効用甚ダ大ナリ。以テ貨幣及ビ電信線電氣器械等ヲ造ルベシ。又錫ヲ交フレバカラカネトナリ。亞鉛ヲ交フレバシチウトナリ。金ヲ交フレバシヤクドウトナルガ如ク種々ノ金屬ヲ製スベシ。左レドモ銅ハ人身ニ害アリ。故ニ飲食ヲ盛ル器具ニハ用ヒザルヲヨシトス。飲食物ヲ煮ル鍋釜等

ニ用フルハ殊ニヨロシカラズ

第五課

蜜蜂と黄蜂との寓言

暖 亂 筋 美麗 均 螫 疑

踈遠 却 丁寧 防 不審 顧

問答 勵

春暖かにして。園ふも種々の花咲き亂
ま。殊も美事なり。時も黄蜂あり。蜜蜂も

謂て曰く。人の吾を惡みて君を愛する
を何故ぞや。吾ハ形も色も大抵君と同
じ。唯君を體も金色の筋ありて。少しも
美麗ふを見ゆ。ま。君も吾を均しく
羽蟲にして。共に花れ汁を好む。或ハ意
ふ叶はざることあれば。人を螫むなど
少しも異なるおとなし。加ふるに吾を
時々人家ふも出入し。人れ食器などに

も止里人よ親み近づ
くおと多し。然るふ人
常小吾を惡みておろ
きんと也。君ハ常小疑
ひ深くして。容易く人
より近づらず。甚だ人と
疎遠あるに似たまど
も世の人を却て君哉



愛し。君の爲免りは居所を作り。又家根
を葺き。冬は間を丁寧に寒を防ぎて畜
ひ置くは。甚だいぶあしき事からむや
と。蜜蜂答て曰く。君が不審を抱くは已
を顧みざる小由る。君は平生人小益を
るおとなくして。人の妨をのまする
が故小。人皆君を厭ひて。其近づくと
まざるお里。吾を然らず。終日人れ爲め

又蜜を集めて。忙はしき毛厭ふざれば。
人自ら吾働き勤むるを好して。吾を愛
するに至る。君もし人の君を愛せん
と欲せむ。妄りに出て人の妨げを
せむ。且つ無益の時間を費さむして。專
ら人を益するを務むべしと
汝等も今此問答を聞きて。如何小思ふ
や。汝等も亦黄蜂に如くに。無用の處に

行きて空く時間を費し。人小厭はるゝ
とをせんよりハ。蜜蜂に倣ひて自ら
勉め勵むべし。是即ち己を益し。人に愛
せらるゝの道なり

第六課

食鹽 記

鹽泉 石鹽 痕跡 海濱 砂場
盛 暫時 瀘 煮 鹽竈

食鹽ハ人ノ飲食ニ用ヒテ。一日モ欠ク
ベカラザルモノナレドモ。何ヲ以テ製
スルヤ。鹽泉石鹽ノ類アリト雖モ多ク
ハ海水ヲ以テ製スルヲ常トス。今試ニ
一滴ノ海水ヲ取りテ。日光ニ曝セバ水
分ハ蒸シ散ジテ。少許ノ白キ痕跡ヲ留
ムベシ。是即チ鹽分ナリ。製鹽ノ法多ケ
レドモ。先ヅ海濱ノ砂場ヲ平カニシ。晴

天ノ日之ニ海水ヲ
注ギテ日光ニ曝シ。
斯クスルコト數回
ニシテ。砂上ノ鹽分
白色ヲ現ハスヲ待
チ。此砂ヲ大桶ニ盛
リ。其上ニ海水ヲ注
ギ入レテ力キ交フ



レバ。暫時ニシテ鹽分ハ解ケテ砂ハ桶ノ底ニ沈ムベシ。其水ヲ瀘シ釜ニ納レテ煮ツメタルモノヲ食鹽ト云フ。其海水ヲ注ギテ曝ス所ノ砂場ヲ鹽田ト云ヒ。海水ヲ煮ル所ヲ鹽竈ト云フ

第七課

虹霓

背 含 霧 象 映 紫 紺 淡

青 綠 黃 樺 赤 三角鏡 瀑

布 飛沫 蒸氣機關 噴氣 射

虹霓の天に現はるゝも如何なる理にや。今試に晴天の日。太陽を背きて立ち。水を口中小含み。霧の如くに己が面前の空中に吹けば。忽ち虹霓其象を現はすことあり。是即ち虹霓の天に現るゝと同一の理なり。夫虹霓は小雨の時。

若くも大氣中に水氣を含める時。日光の之に映じて生ずる者なまば。朝は必
ず西にあらはま。夕は必ず東に現れ
て。常に太陽と相對
する。天の一方に現
る。又大陽は天に
ある。と。愈高き
を其虹愈低く。大陽



愈低きを其虹愈高し。而して虹を皆
七色にして。紫。紺。淡青。緑。黄。橙。赤。と。是
大陽乃本色なり。試に三角鏡を以て。大
陽の光を寫せば。此七色現るべし。又
日光に瀑布の飛沫を照るとき。或ハ蒸
氣機關の噴氣を射ると。亦も。同一の象
現る。とあり

第八課

森蘭丸

近臣 質直 利發 鞘 款紋 欺

感

織田信長ノ近臣ニ森蘭丸ト云ヘル者アリ。幼キ時ヨリ質直ニシテ利發ナリ。信長ノ刀ノ鞘ニ數十ノ款紋アリシガ。蘭丸曾テ陰ニ數ヘ知レリ。信長或ル日近臣ヲ集メテ款紋ノ數ヲ暗ニ言ヒ中



ツル者ニハ此刀ヲ與ヘント云ヒシカバ近臣皆爭ヒテ言ヒ中テントスルニ。蘭丸獨リ默シテ言ハズ。信長怪ミテ其故ヲ問ヘバ臣既ニ其數ヲ知レリ。若シ

知ラザル者ノ状ヲナシテ之ヲ言ヒ中
テタランニハ。是主君ヲ欺キテ其賜モ
ノヲ貪ルナリ。臣深ク心ニ恥ゾト答ヘ
ケレバ。信長其誠實ナルヲ感じテ。遂ニ
其刀ヲ與ヘタリトゾ

第九課

麥記

裸麥 拘 飴 麴 味噌 麴包

菓子 温飴 索麴 播種 蹈 除

栽培

穀類中米ニ次ぎて。大切なるも乃は麥
かり。麥に大麥小麥裸麥等の類あり。大
麥は地の寒熱ニ拘ハラズよく成熟す。
秋種子を下し。翌年の夏ニ至りて成熟
す。飯に炊ぎ麥酒或造り。麥芽をとりて
飴を製し。麴となして味噌或作る等。其

効用甚だ多し。小麥も亦其用ひ方少く
らむ。麴子。温飩。索麴等ヲ製し。又醬
油。或作るべし。其播種するにも。大麥よ
り稍早きをよし
とす。裸麥は大抵
大麥に同じ。但小
麥乃耐ふること
能はざる寒地に



も亦よく成熟す。總べて麥類を深く種
うる或よしとす。然らざるも寒氣の爲
免ふ害せらるゝことあり。苗乃時に
之を踏つけ。且つ屢鋤を入て雜草
除くべし。歐羅巴。亞米利加。諸國を特
に麥を重んじて。常食は闕くべからず
はものとき。故に海外各國ともに之を
栽培せざる所なし

第十課

地方ノ政

知事 管内 政務 總管 書記官

收稅長 警部長 職務 分掌

地方稅 支辨 議定 議負

府縣ニ知事アリテ各其管内ノ政務ヲ總管シ。書記官。收稅長。警部長アリテ各其職務ヲ分掌ス。又府縣廳ノ下ニハ郡

役所區役所アリテ。郡長。區長之ヲ掌リ。町村ニハ戸長役場アリテ。戸長其事ヲ理ム。又府縣ニハ府縣會アリテ。地方稅ヲ以テ支辨スベキ經費ヲ議定シ。町村ニハ町村會アリテ。町村内ニ費ス所ノ協議費ヲ評決ス。其議負ハ總ベテ人民ノ選ブ所ノモノトス

第十一課

土地

官有

民有

官衙

地券

宅地

原野

地租

賦課

廣狹

委任

地坪

一畝

地價

土地に官有地と民有地と乃別あり。官有地とハ政府諸官衙乃用地として。概ね地券發せざれども。又地券發せるも能きあり。民有地とハ人民乃私有

せる田畑。宅地。山林。原野の類にして。總べて地券發し。地租。地方稅等を賦課するも能き云ふ。土地乃廣狹決定むるも。皆地方廳に委任せらる。其地坪を量るに。六尺四方一坪と云ひ。又一步とも云ふ。三十步一畝と云ひ。十畝を一段と云ひ。十段を一町と云ふ。其地券を發せるも能き。中。地租を課するもの

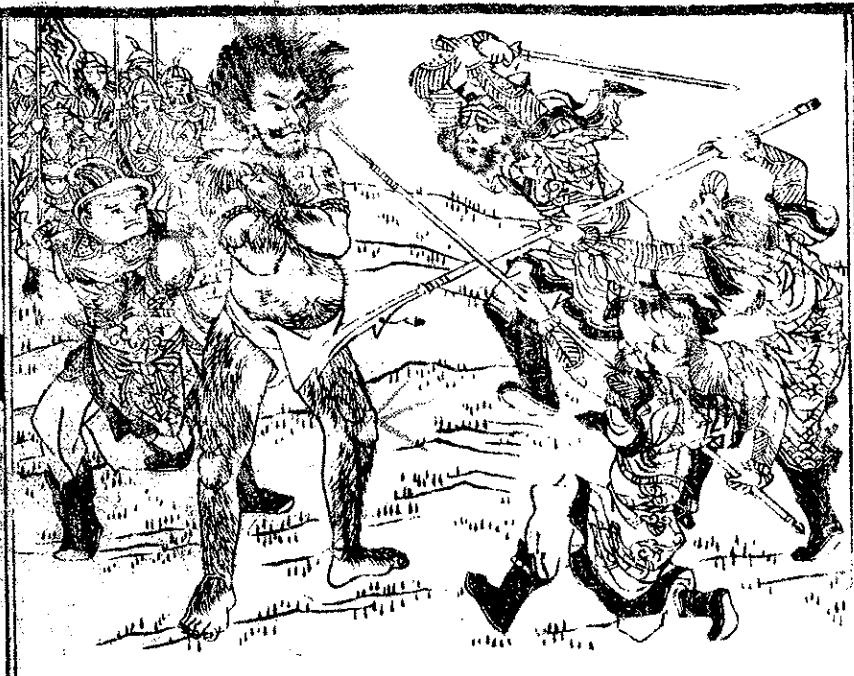
又地價を付し。地租を課せざるもの
にハ地價を付せることなし

第十二課

伊企儼

尊王愛國 誓 國威 侮 新羅
敗 執 拔 劫 臀肉 呼 侵
辱 屈

凡ソ日本國ノ臣民タル者ハ常ニ尊王



愛國ノ志ヲ存シ。誓
ヒテ國威ヲ張り苟
モ外國ノ侮リヲ受
ケザルヤウ心ガク
ベシ。昔欽明天皇ノ
御代新羅ヲ討チシ
時伊企儼其軍ニア
リシガ軍敗レテ執

ヘラル。新羅ノ人刀ヲ拔キ之ヲ劫シテ
曰ク。汝宜ク日本ノ大將ハ我臀肉ヲ食
ヘト言フベシ。否ラザレバ我今汝ヲ殺
サント。伊企儼乃チ大ニ呼ビテ。新羅王
我臀肉ヲ食ヘト言ヒケレバ。新羅王大
ニ怒リテ。之ヲ侵シ辱ムレドモ。終ニ屈
セズシテ殺サレタリトゾ

第十三課

雨

湯氣

茶碗

覆

無色

透明

凝

墜

藥罐鐵瓶の類より湯氣は上る時。茶碗
を以て其湯氣は覆へむ。初め茶碗の
内は水氣を生じ漸く時を経る。水と
なり滴り下る。是藥罐若くは鐵瓶中の
水は熱して湯氣となり。空際より上らん



とするに。忽ち冷や
 うかる茶碗と遇ふ
 て其熱失ひ元の
 水は復るか。里雨も
 亦此理。外ならむ。
 河海等此水も大陽
 の熱を受くれバ。水
 蒸氣となりて空中

は上る。水蒸氣も其無色にして透明か
 るが為め。眼は見るべからざる。とも
 常は空中に充滿して。寒冷なる空氣と
 遇へむ。其熱を失ひて凝り。水は復りて
 空中より地上に墜つるなり。之れ名づ
 けて雨と云ふ

第十四課

友ヲ選ブベキノ話

日頃 鳩 足跡 荒 翌朝 鐵砲
 物蔭 隠 窺 群 哀 飼主
 惡報 擇

一農夫アリ日頃鳩ヲ愛シ。常ニ穀物ナ
 ド多ク與ヘテ飼ヒケルニ。其後鳩ハ我
 家ニ居ルコトヲ好マズ。朝ニ飛出デタ
 ルマ、夕ニ至ラザレバ歸ラザレドモ。
 更ニ意トセズシテ益々愛シ養ヒシガ。

或ル日。作物ヲ見ント
 テ畑ニ出行キシニ。畑
 ハ鳥ノ足跡ノミニシ
 テ。蒔キタル麥種ハ。半
 バ既ニ食ヒ荒サレタ
 リ。農夫之ヲ見テ大ニ
 怒リ。翌朝ハ早ク起キ
 鐵砲ヲ携ヘテ行キ。物



陰ニ隠レテ窺ヒシニ。暫クアリテ多ク
ノ鳩群リ來リ。尚畑ニ殘レル麥種ヲ食
ハントセシカバ。農夫乃チ鐵砲ヲ放チ
テ一羽ヲ打留メ。近ヅキ見レバ我飼鳩
ナリシトゾ。此鳩ハ何故ニ此ノ如クニ
哀レノ死ヲ取リシヤ。是其飼主ノ恩ヲ
忘レテ。惡シキ友ト交ハリシ惡報ナリ。
故ニ汝等モ亦常ニ慎ミテ。其親ニ交ル

所ノ友ヲ擇ブベキコトニコソ

尋常小學第四讀本

下卷終

青山忠亮淨書
倉田勝太郎書刻
加藤真管圖畫
野口圓活畫刻

明治十九年十月九日版權免許
同年同月九日出版

定價金九錢三厘

編纂者

廣島縣士族

佐澤太郎

東京府士族

本郷區駒込五丁目十番地

校閱者

茨城縣平民

塚達

出版人

同縣士族

宮本行靖

同

關谷末松

發兌

文榮堂

大賣捌

星文館

福岡縣福岡區下名島町

神田區山本町二十五番地

神田區山本町二十五番地

深川區御船藏前町六番地